

“病院へ行こう”のキモチの仕組みを解明

～「カラダの調子が悪くても、病院に行こうとしない」そんな人あなたの周りにいませんか?!～

**受診を先延ばしにする人のキモチを動かす
「3つの受療スイッチ」の存在が明らかに**

- 人はどのような状況になると受療への意識が高まるのか、を定量的なデータ分析により実証
- 受療意識を高めるスイッチは「原因の理解」「症状の認識」「知識と学習態度」

メディカルライフ研究所（東京都港区）は、日本の生活者の受療行動に関する実態や意識を把握するために「生活者の受療行動に関する調査②」を実施。この度、第3回分析結果をまとめましたので、ご報告いたします。

不調や疾患があると感じていながらも病院に行かずに放置している人が多く存在している中で、では生活者はどうすれば「病院で診てもらおう」という“キモチ”になるのでしょうか。「病院で診てもらおう（受診）」という意識には、「症状について学習したい」という意識が密接に関係しており、またこれらの受診、症状の学習といった受療行動意向を高める為には、3つの大きな“キモチのスイッチ（きっかけ）”があるということ、長期不調症状または慢性疾患の保有を認識している2000人のデータを分析することにより、実証することができました。

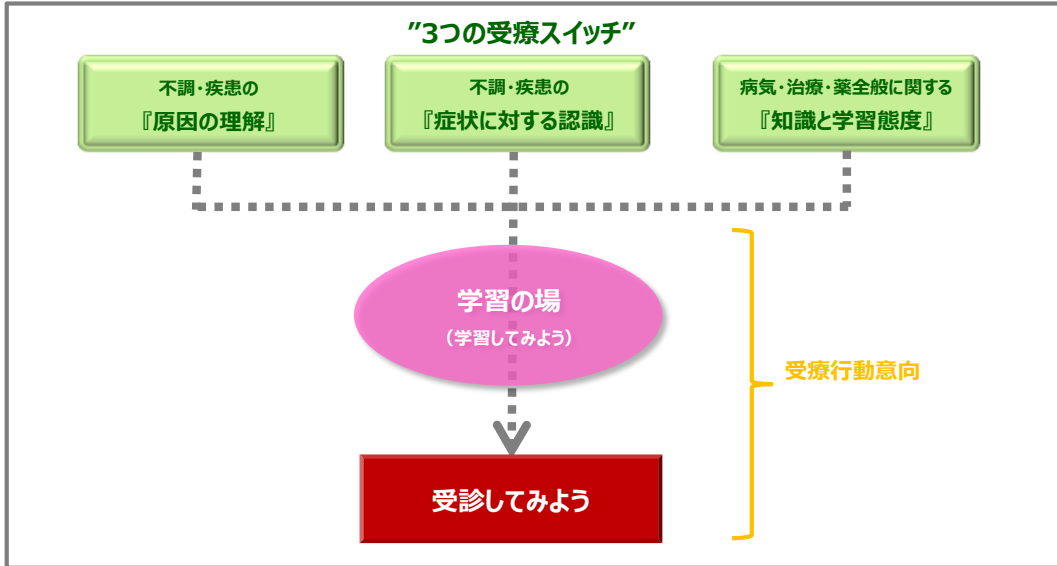
メディカルライフ研究所では、このように生活者の受療行動に対する意識の仕組みを解明していくことは、生活者が健康的な生活を送っていく（及びQOLの向上）為にも必要な「早期受診」を促す手段・方法の確立に、役立てられると考えています。

※ “受療行動”：メディカルライフ研究所では生活者が身体の不調を感じてから医療機関での受診にいたるまでの一連の行動を“受療行動”と呼んでいます。

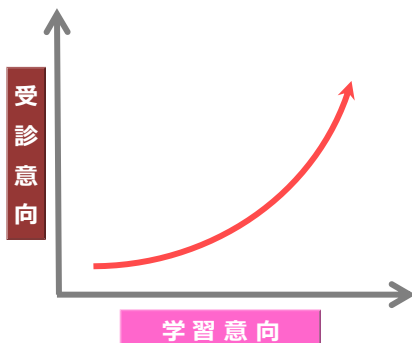
■ 調査結果 詳細

○ 受療行動のモデル図

～3つの受療スイッチと受療行動への流れイメージ～



- メディアや広告、啓発サイトなどを通じて、自分の症状・今後の見通しや治療法・薬について調べるなど、理解を高めようという“学習意向”が高い人ほど“受診意向”も高くなる傾向がみられています。



- 受療行動意向を高める 3 つのスイッチとして、『不調・疾患の原因の理解』『不調・疾患の症状に対する認識』『症状・治療法・薬全般に対する知識と学習態度』があります。これらのスイッチのいずれかが入ることによって受療行動への意識が高まるようです。

【スイッチ①：不調・疾患の原因の理解】

本人がその症状(疾患)の“原因”について、「この症状(疾患)の原因は“〇〇（加齢、感染、不摂生など）”にある」と強く思うほど、受療行動への意識も高まる傾向があります。

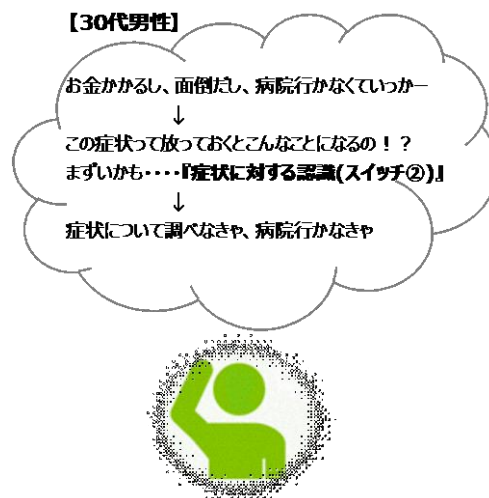
【スイッチ②：不調・疾患の症状に対する認識】

本人がその症状(疾患)について、「よくあるような一般的な症状ではない」「周りの人達に不快な思いをさせ迷惑をかけている」などと強く思うほど、受療行動への意識も高まる傾向があります。

【スイッチ③：症状・治療法・薬全般に対する知識と学習態度】

例えば、本人が「治療法について知識がないと不安だ」「薬に対する知識がなければ不安だ」や、「自分で調べることによってよりよい治療が受けられる」などと強く思うほど、受療行動への意識が高まるようです。

- 年齢や、保有している不調、疾患によって、強く影響を与える“スイッチ”は異なると考えられます。例えば、病院に行かない理由として「お金がないから」が上位にあがるような30代男性では（メディカルライフ研究所第2回リサーチレポート 2013年3月より）、まず「この症状は、放っておくと大変なことになる（＝スイッチ②：症状に対する認識）」としっかり意識してもらうことが、受診への“キモチ”を高めると思われますが、他の性年代であればその人の状況（意識、ライフスタイルなど）にあったキモチの“スイッチ”があるはずです。



■ 「生活者の受療行動に関する調査 ②」 調査概要

調査対象者： 全国の20代～60代男女
 調査方法： インターネット調査
 調査時期： 2012年9月
 調査サンプル： 有効回収数 2,000

※結果詳細については、「メディカルライフ研究所 Research Report」に記載しています。

⇒メディカルライフ研究所 URL <http://www.medicallifelab.jp>

■メディカルライフ研究所概要

生活者視点で健康・医療のこれからを考え、生活者・ドクター・医療従事者・MRを“つなぐ”マーケティング・コミュニケーション研究を行う組織として、株式会社読売広告社（本社：東京都港区、代表取締役社長：中田安則）と株式会社嵯峨野（本社：東京都新宿区、代表取締役：木村寿伸）が共同で双方の横断型社内組織として設立。

メディカルライフ研究所は生活者のヘルスケア活動、医療機関への受療行動の“これからを考え”、

- ① 生活者視点で健康・医療産業と生活者を適切につなぐための、調査・研究、啓発活動を実施します。
- ② 医療機関、製薬メーカーに向けた、生活者視点のマーケティング・コミュニケーション施策支援、情報ソリューションを提供してまいります。

■メディカルライフ研究所事務局

〒107-6105 東京都港区赤坂5丁目2番20号 赤坂パークビル
株式会社読売広告社 R&D局内
TEL 03-5544-7324

■メディカルライフ研究所 リサーチレポート

メディカルライフ研究所では、生活者の健康や病気に対する意識の研究から活動をスタート。

「生活者の受療行動に関する調査」を行っており、独自の視点で研究レポートを発信してまいります。

なお、調査・研究においては、『病気関連行動 (illness behavior)』について多くの研究知見を保有するシンクタンク 株式会社応用社会心理学研究所（代表：廣田君美）とパートナーシップを結び、協業して実施してまいります。受療行動モデルの考え方は「株式会社応用社会心理学研究所（アспект）」がこれまで行ってきた病気関連行動に関する研究の成果を踏まえて設計されています。

<本件に関するお問い合わせ>

◇メディカルライフ研究所（株式会社読売広告社R&D局内）

上野 関

TEL : 03-5544-7324 info@medicallifelab.jp